HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	安部公房『箱男』論 : 覗き、写真、語りをめぐって
Author(s)	李, 楚妍
Citation	研究論集, 24, 41（右）-56（右）
Issue Date	2025-01-24
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.24.r41
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94047
Type	departmental bulletin paper
File Information	21_rjgshhs_24_p041-056_r.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgshhs.24.r 41

安部公房『箱男』論

――覗き、写真、語りをめぐって――

李　楚妍

要　旨

安部公房の長編小説『箱男』は一九七三年三月に純文学書下ろし特別作品として新潮社より刊行された。主人公の箱男は頭から腰までダンボール箱をかぶり、箱の覗き窓から世界を観察し都市を放浪する特異な存在である。『箱男』はネガフィルム、写真、文字の断片で構成され、その内容も構造も複雑であるため、よく難解な作品とされている。先行研究においては、『箱男』の様々な問題点が論じられてきた。例えば、作品に挿入された写真とネガフィルム、作品における空間と時間、作品の構造と語り、箱男の匿名性と社会性、他者の概念、「見る」と「見られる」などである。その中、八角聡仁（一九九四・八、『ユリイカ』）は箱男が無意識の領域を写し出すカメラのような眼差しを持ち世界を観察すると指摘し、田中裕之（二〇一二・三、『安部公房文学の研究』）は箱男が社会不適応者と批判した。箱男という存在様態は未だに解明されていないところが多く、本稿では覗き、写真、語りという三つのキーワードを中心に箱男の内実に迫り、『箱男』の新たな読解を提示したい。まず箱男の「覗き」の原理を分析し、箱男が他人に見られたくない理由を探り出し、「彼女」の人物像について検討する。次に『箱男』に挿入されたネガフィルムの現像過程を明晰にし、写真の撮影者を推定する。最後に『箱男』の語りについて考察し、作品における「書く」ことの意味を探究し、各断片の語り手を判明する。『箱男』は箱男という不思議な存在を創り出し、様々な仕方で概念枠を打破し、新世界への通路を読み手に示す大変貴重なテクストと考えられる。

一、はじめに

安部公房の長編小説『箱男』は一九七三年三月に純文学書下ろし特別作品として新潮社より刊行され、一九八二年一〇月に文庫化された。主人公の箱男は頭から腰までダンボール箱をかぶり、箱の覗き窓から世界を観察し都市を放浪する特異な存在である。『箱男』

はネガフィルム、写真、文字の断片で構成され、その内容も構造も複雑であるため、よく難解な作品とされている。

先行研究において、『箱男』の様々な問題点が論じられてきた。例えば、作品に挿入された写真とネガフィルム、作品における空間と時間、作品の構造と語り、箱男の匿名性と社会性、「見る」と「見られる」、他者の概念などである。特に、主人公の箱男についての論考が多く行われた。その中、八角聡仁[1]は箱男が無意識の領域を写し出すカメラのような眼差しを持ち世界を観察すると指摘し、田中裕之[2]は箱男が社会不適応者だと批判し、片野智子[3]は権力と監視の視点から箱男について考察した。箱男という存在様態は未だに解明されていない所が多く、本稿では覗き、写真、語りという三つのキーワードを中心に箱男の内実に迫り、『箱男』の新たな読解を提示したい。

二、「覗く」ことの原理

1　「見る」と「見られる」

『箱男』の先行研究では、「覗く」ことはよく論及されてきた。覗くことは箱男の内実と関わる性質で、箱男が持つ重要な特徴である。本章においては箱男が熱中する覗くことの原理を分析し、箱男の内実に迫る。また、「彼女」という人物は覗くことと深く関連しているので、「彼女」の人物造形についても考察する。

箱男は覗き窓を通して世界を覗いている。作品によると、「覗き窓の加工」は「もっとも慎重を要する」ことで、覗き窓に掛ける艶消しビニール幕は「誰からも覗かれずにすむ」役割を持ち、箱男が一方的に覗くことを保証してくれる[4]。この点について、八角は箱男が「見る／見られるという関係の『外』に立って見る」[5]と指摘している。それだけでなく、箱男の「覗き」はまた別の意味を持つと考えられる。箱男が覗き窓から見た風景は、作品で次のように描かれている。

> 誰でも、風景に接した場合、つい自分に必要な部分だけを抽き取って見がちなものである。（中略）ところが、箱の窓を額縁にして覗いたとたん、すっかり様子が違ってしまう。風景のあらゆる細部が、均質になり、同格の意味をおびてくる。タバコの吸殻も……犬の目脂も……（中略）爪の垢も……しまりの悪いマンホールの蓋も……でも、ぼくはそんな風景が大好きだ。遠近が定まらず、輪郭が曖昧で、ぼくの立場とも似通っているせいかもしれない。ごみ捨て場のやさしさ。箱から覗いているかぎり、どんな風景も見飽きることがない。[6]

箱男の覗き窓は都市の風景を均質にさせ、世界のあらゆる細部を映し出す機能を持っている。世界を観察する際に、人間は絶えず物事を概念化しようとし、物事に意味を付与している。それに対し箱男は覗き窓を作り、人間が参照する概念枠を打破し、概念を借りずに物事を認識しようとする。世界を覗き窓から観察する際に、箱男

は一種の現象学的還元を行っている。箱男の観察法はいかにも純粋で、彼はそのような観察法に心酔したから箱の中で暮らすようになったと言っても過言ではない。

ここでさらに注目すべきなのは、見ることと見られることは相互的という点である。箱男は自分の観察法を創り出し世界を見る一方、彼の見られることへの見方も同時に変わる。箱男は覗き窓によって世界を還元することができるが、箱男以外の他人にも同じようなことを強制するわけにはいかない。だから箱男は自分を箱の中に閉じ込め、他人の視線を遮断することにしたのだろう。従来、箱男の「覗く」ことへの執念はよく論及されていたが、箱男が他人に見られたくない理由はまだ明晰になっていない。このように、箱男の世界の観察法と対照的に考えれば、箱男が他人に見られたくない理由も分かってくる。すなわち、箱男は概念を借りずに世界を見ようとすると同時に、他人にも自分と同じような純粋な視線を求めている。しかし、箱男のように純粋な視線を持つ人間はなかなかいないので、箱男はやむを得ずに自分を箱に閉じ込め、一方的に覗くことにした。箱男が他人に見られたくないということは、他人に恣意的に定義され概念化されたくないことに由来すると思う。

従って、箱男という存在をポジティブに捉えても良いのではないか。田中裕之は箱男が「現代的な犯罪の行為者となってしまう人間関係に失調をきたした社会不適応者」[7]と批判し、箱男をネガティブな存在として捉えているが、実際のところその逆なのではないか。人間社会において独断的で恣意的な視線が交錯しており、他人を定義し概念化するような行為は絶えず発生している。箱男はそのような人工的概念によって構築された贋の世界を嫌悪するので、人間社会から脱出し他者になる。彼らは箱をかぶることで匿名性を獲得し、概念化された世界から逸脱する。しかし、それでも彼らは世界との繋がりを断たなかった。箱男は覗き窓を作り、特有の観察法を発明し、世界との繋がりを柔軟に保っている。社会から逸脱し他者の立場に立っているのに、なおも世界と繋ごうとする彼らのこの行為は、ポジティブと言えるだろう。世界を概念化したくないので、覗き窓から世界を観察する。他人に概念化されたくないので、箱をかぶり覗き窓に艶消しビニール幕を掛け、見られることを拒絶する。箱男は自分を変形することによって、概念化から切り離された世界を追求しているのである。

2　純粋な視線を持つ「彼女」

先行研究において「彼女」に関する論考はあまり見受けられていないが、「彼女」と箱男との関係性は深いので考察する必要があると考えられる。「ぼく」と「彼女」との出会いは「ぼく」の変化のきっかけである。「彼女」は五万円を「ぼく」に与え、箱を引き裂き海に流してくださいと「ぼく」に依頼する。「ぼく」は当惑し、次のように考える。

（前略）箱を脱げるのは、昆虫が変態するように、それで別の世界に脱皮できる時なのだ。彼女との出会いで、もしやその機

会をつかめたのかと、ひそかに期待していたのに……
もっとも、箱男という人間の蛹から、
どんな生き物が這い出してくるのやら、
ぼくにだってさっぱり分らない。[8]

「ぼく」にとって、「彼女」は特別な存在である。「ぼく」は「彼女」との出会いによって、箱を捨て別の世界に脱皮できるのではないかとさえ考えている。この引用部分の最後の三行の文字配列は特異であり、「ぼく」の未来への期待と不安を強調するように見える。

「彼女」は妊娠中絶の手術をきっかけに病院の看護婦となった。「彼女」は絵を描くことが好きで、モデルの仕事にも興味を持っている。「ぼく」と異なり、「彼女」は見られることを恐れず、人に見られることを好んでいる。「ぼく」は見られることを極めて嫌悪しているのに、「彼女からだと、いくら見られていても、ほとんど見られた気がしない」。「ぼく」から見れば、「彼女」は天性の覗かれ屋で、「強力万能浄化装置」でもあり「欲望解放装置」[9]でもある。

前述のように、箱男の「ぼく」は他人に定義され概念化されたくないので、見られることから逃げている。しかし「彼女」の前では「ぼく」はいくら見られても平気である。このことは、「彼女」が箱男と同じように、概念を借りずに世界を観察しようとすることを呈示しているのではないだろうか。「ぼく」はまさに「彼女」のような純粋な視線を求めているのである。また、「彼女の絵は完全な非具象」だと「ぼく」は述べているが、その完全な非具象な絵も「彼女」の純粋な視線を仄めかしていると考えられる。「彼女」から見れば、世界は概念と切り離され非具象となっており、「彼女」の絵は「彼女」の目に映った非具象的な世界を反映している。他人に定義されることを恐れる「ぼく」にとって、他人を定義せず、見られることを歓迎する「彼女」は極めて魅力的で、且つ理想的な存在なのだろう。

「彼女」の名前も一定の意味を持っている。「安部の小説に登場する固有名は、何らかの仕掛けを持っている」[10]と鳥羽耕史が提示したように、「彼女」の名前自体も興味深い。贋箱男（贋医者）のCによると、「彼女」の本名は「戸山葉子」[11]である。「山」は「産」と同音であり、戸山葉子が妊娠中絶の手術を受けることを想起させる。また、「葉子」は「箱」とは同音であり、箱男との関連性を提示しているように思える。

『箱男』の結末近くで「ぼく」は「彼女」と共同生活を送り、箱を脱ぎ新しい生活様式を探究する。「彼女」から見れば「ぼく」は「部分に分解してしま」い、全体として認識されていない。このような観察法は、「ぼく」が覗き窓を通じ世界を見る方法とかなり共通している。「ぼく」はずっとこのような視線が欲しかった。「彼女」の前では、「ぼく」は定義されることを恐れる必要がなく、箱をかぶらなくても自由になれる。

「彼女」との関係について、片野は「権力的関係」や「監視」[12]の視点から考察を行ったが、作品の結末部においてこのような原理がうまく働いていないと考えられる。結末部において「ぼく」と「彼女」は一般的な人間社会から脱出し、病院という相対的に独立した空間

で暮らすようになった。ここで問題視すべきなのは権力といった人間の古い構築物のほうではなく、人間の構築した世界から逸脱した後の新しい境地のほうではないだろうか。「ぼく」と「彼女」が一心に探究しているのは、概念枠に統制されていない新しい世界なのである。

三、ネガフィルムと写真

1　現像できるネガフィルム

『箱男』は文字で書かれた二十四枚の断片と、一枚のネガフィルムと、八葉の写真によって構成されている。『箱男』に挿入されたネガフィルムも写真も主人公の箱男と密接に関わっており、箱男の視界を反映すると考えられる。

まずネガフィルムについて考察する。ネガフィルムは『箱男』という題目の次のページに掲載されている。このネガフィルムに関する先行研究として、永野宏志[13]と中野和典[14]の論文が挙げられる。永野も中野もネガフィルムに触れ、ネガフィルムと『箱男』の本文との関連性に言及していたが、まだ十分に解明されていないところが存在する。本章ではネガフィルムの現像過程と、現像した写真と本文との関連性などについて具体的に検証する。

図1は『箱男』に挿入されたネガフィルムである。このネガフィルムを単に肉眼で観察すれば、何が映っているのかよくわからない。しかしもしこのネガフィルムを現像できれば、その中身を理解することが可能となる。周知のとおり、現像前のネガフィルムと現像後の写真とは、上下、左右、そして色はすべて相反している。筆者はアドビフォトショップを利用し、元のネガフィルムの画像を上下、左右に反転させ、その色をも反転し、図2を獲得した。図2が現像後の写真であるはずだが、その向きは正確ではない。印画紙に映っ

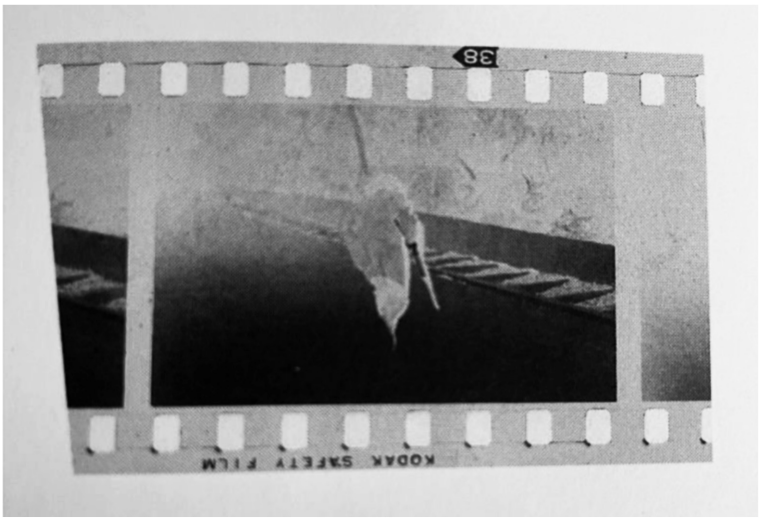


図1

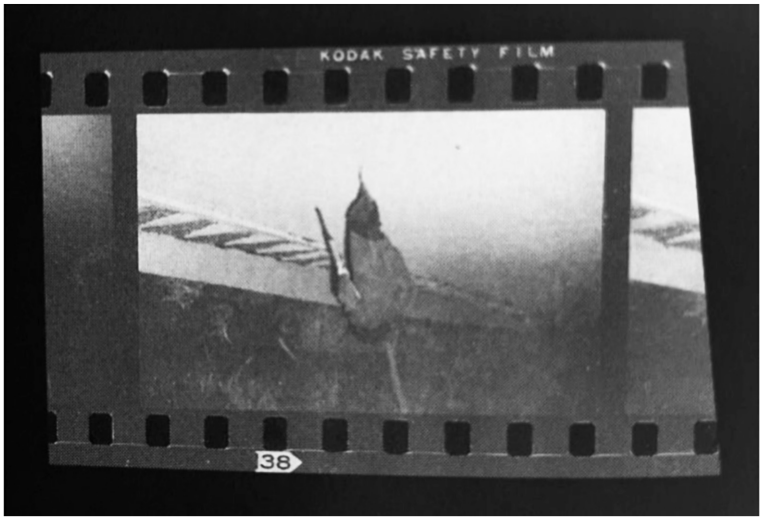


図 2

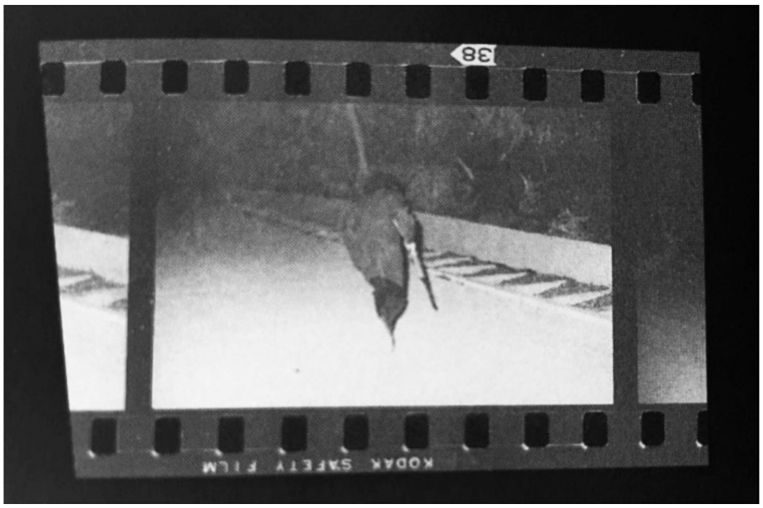


図 3

た写真を手に入れた際に、写真の向きが間違い、自分で写真を回転するのはよくあることだ。それと同じように、ここでは現像した写真の向きを変えることが必要である。図2を一八〇度回転させたら図3になる。図3こそ、向きが正確な現像後の写真である。中野[15]はネガフィルムの色を反転しただけで図3のような図像を獲得したのだが、変換の原理が不明で説得力は低い。写真の内容を検討する前に、まずこのように写真の現像過程を明晰にさせなければならない。

本文において、「ぼく」は自分が「白黒のネガ・フィルム」を「表紙裏の右上の隅」に「セロテープで貼りつけた」[16]と述べている。こ

れは、『箱男』という作品に挿入されたネガフィルムのことを指しているのか。調べたところ、『箱男』の初刊版[17]においても文庫版[18]においても、ネガフィルムは確かに作品の「表紙裏の右上の隅」にある。全集版は少しずれているが、「表紙裏の上」にはある。ネガフィルムの位置に関して齟齬は少しあるのだが、基本的には一致すると言えよう。

さらに、「ぼく」はネガフィルムに映った人物について次のように説明している。

> 空気銃を小脇に、銃口を下に向けて体のかげに隠し、小走りに逃げて行く中年男の後ろ姿。引伸してみれば、さらにこまごました特徴も見分けられるだろう。着こなしは悪いが、張りのあるかなり上等の生地。それにしては、皺だらけのズボン。太くがっちりはしているが、労働の経験はなさそうな、先のまるい指。それから、何よりも目立つのが、変り型の靴。甲の浅い、脇がえぐれた、スリッパ式の短靴。[19]

人物の描写についても、「ぼく」が説明するネガフィルムと現像した写真の内容とは一致すると言えよう。また、「ぼく」はネガフィルムに映った風景などについて次のように説明している。

> 側面の小穴から覗くと、工場の塀が終って坂になり、舗装が切れて砂利道になり、養鶏場の芋畠ぞいにカーブしはじめたあたりに、桑の古木が枝をひろげていた（写真の左端にその一部が見えている）。その陰から体をひねって（つまり逃げ腰の姿勢で）男がひとり立上りかけている。[20]

人物だけでなく、「ぼく」が説明する風景も写真に映った風景と酷似している。また、「ぼく」は「三回シャッターを切った」と述べているが、現像されたネガフィルムの両側には確かに二枚のネガフィルムの断片が見えている。そしてその両側の断片の内容も、真ん中のネガフィルムの内容と類似している。

位置、人物、風景、そして三枚のネガフィルムを考察することによって、「ぼく」が説明するネガフィルムと『箱男』に挿入されたネガフィルムとの高い一致性を確認できた。「ぼく」が説明しているネガフィルムは、『箱男』に挿入されたネガフィルムとは同一物と言えよう。また、「ぼく」はこのネガ・フィルムをノートの表紙裏の右上の隅に貼りつけたと述べているが、この記述によって一つの重要な結論を導き出すことができる。つまり、『箱男』という作品全体は箱男のノートそのものだという結論である。

2　写真とその役割

『箱男』全体をノートと見做すのなら、『箱男』に挿入された八葉の写真もノートの一部と言えよう。作品において、カメラは重要な事象である。カメラマンだった主人公の「ぼく」は自ら箱男になり、カメラと化し都市風景を撮る。ネガフィルムも写真もカメラとの関

係が深く、箱男の内実に迫り新しい読解を求めるのに、写真とその役割などを解明する必要がある。

写真の挿入箇所と順番について、高田一樹[21]は八葉の写真の挿入箇所がそれぞれ異なっているが、順番は変らなかったと指摘している。『箱男』の初刊版、文庫版、全集版に挿入された写真を確認すると、確かに高田の指摘した通りである。

作品において写真の撮影者の身元は明らかになっていないが、それは箱男と考えられる。以下のように、三点の理由を挙げる。

一点目の理由は「見ると見られる」という関係にある。この点について、真銅正宏[22]と八角は論及したことがある。その中、八角は八葉の写真は「隠し撮り」したもののようで、「ぼく」が撮った写真と思われると述べた[23]。確かに、これらの写真に映った人物はいずれも撮影者に一方的に見られており、撮影者の方を見ていない。見られずに一方的に見るという点から見れば、撮影者の目線は箱男の目線とかなり類似していると言えよう。

二点目の理由は撮影する位置の低さにある。八葉の写真をよく観察すると、写真3はともかく、ほかの写真のカメラの撮影する位置はいずれも低い。普通な撮影者にとっては低すぎる位置かもしれないが、箱の中で周囲の物事を覗く箱男にとってはむしろ適合した位置だろう。

三点目の理由は写真の黒い四角の枠にある。具体的な説明はしていないが、永野はこの「黒い四角」[24]に言及したことがある。八葉の写真を見ると分かるように、写真にはいずれも黒い四角の枠が付随している。全集版だけでなく、初刊版と文庫版に挿入されたすべての写真には黒い四角の枠が付いている。黒い四角の枠を作った理由は何だろうか。筆者の考えによると、黒い四角の枠はほかでもなく、箱男の覗き窓の一部なのである。箱男は四角い覗き窓を作り、それを通じて箱の内部から外部の世界を観察する。外の世界は明るいが、箱の中はより一層暗いので、箱男の視界に四角い覗き窓の黒いふちが入っている。写真に付随する黒い四角の枠は、これらの写真が箱男の目線から撮られたものであることを呈示している。以上の三点の理由から、『箱男』に挿入された八葉の写真の撮影者は箱男と結論づけたい。

ただし、八葉の写真は箱男に撮られたとは言えるが、すべての写真が一人の箱男によって撮られたとは言えない。作品において、語り手は覗き窓の加工が「それぞれ個人差もある」と説明した。つまり、箱男たちが作った覗き窓の形はそれぞれ異なっている。また、「補助の覗き穴」も作品のなかで言及された[25]。覗き窓だけでなく、箱男はほかの覗き穴をも作っている。箱男は異なる穴から外の世界を覗くことができ、それに対応する「黒い四角の枠」の形も変化する。筆者は全集版に掲載された八葉の写真のサイズを測ってみたが、そのサイズがすべて異なっており、形が完全に一致した写真は存在していない。このことから見れば、八葉の写真に映ったのは異なる覗き窓（覗き穴）から見た景色と言えよう。複数の箱男がそれぞれの一つの穴から見た景色、同一の箱男が複数の穴から見た景色、複数の箱男が複数の穴から見た景色という三つの可能性は存在して

いる。

写真だけでなく、写真に添えられたキャプションにも注目すべきである。ハーディンとの対談の中で、安部は「説明文は必ずしも写真を説明しているのでは」なく、「写真は全体として詩であるべき」[26]と述べた。確かに、写真とキャプションは一義的に理解すべきではない。この辺について、高田は「【写真8】に付されたキャプションは細かな行替えが行われている」と述べ、「写真と文字が一対一対応になっているのではなく、むしろイメージの共有という方向性が考えられる」[27]と指摘している。高田の観点は安部の述べたこととは共通している。写真8について高田は具体的に考察していないが、ここでは写真8を例として、写真とキャプションとの関係について少し詳しく考察する。

ほかの写真のキャプションは概ね一段落しかないが、写真8のキャプションだけは詩のように細かい行替えを行っている。また、写真8に映った廃車も断片的で、下部には裂け目があり、二つの断片によって組み合わせられたように見える。ほかの写真にはこのような断片的な特徴が見受けられない。写真8もそのキャプションも断片的というところから見れば、写真とキャプションとは一種の構造上の統一性が存在している。前述のように、箱男は多数の覗き穴を持つことが可能である。この写真8は、ある箱男が二つの覗き穴を通じて見た風景なのかもしれない。

このように、安部が写真を『箱男』に入れた動機は浮上してきた。第二章で述べた通り、箱男は覗くことに熱中し、概念を借りずに世界を認識しようとしている。しかし、そのことが可能だとしても、それを言葉で描き出すのは困難である。言葉こそ人間の最大の構築物かもしれない。人間は様々な概念を創り出し、言葉で世界を説明しようとしている。言葉が生成したとたんに、無意味なものは捨象され概念が定着するので、言葉を概念と切り離すことはできない。言葉と、概念枠から逸脱しようとする箱男との間には矛盾が存在している。この矛盾をある程度解消するために、安部は写真を『箱男』に入れたと考えられる。写真を見ることと文字を読むこととは異なっており、読み手は箱男のように物事を見ることが可能であり、物事をより自由に認識することができる。読み手に写真を見せる際に、言葉で図像の意味を伝達することが不要となり、読み手は写真に映ったものを直接に認識することができる。写真にはキャプションがついているが、ここにおいてはそれは説明のために付け加えられたものではなく、本文との媒介として機能している。写真はキャプションによって制限されておらず、写真を相対的に独立したものとして鑑賞することが要請されている。

『箱男』に挿入された写真を鑑賞することによって、読み手は箱男のように物事を見ることが可能となり、箱男の観察法を身につけそれを実践することができる。作品の冒頭部で箱の製法が詳しく紹介されていることも、読み手に箱男の生活を体験する可能性を与えてくれる。『箱男』は可能性に満ちたテクストであり、読み手が概念枠から逸脱する触媒になれるのかもしれない。

四、『箱男』の語り

1　虚構性と語り手の問題

『箱男』は断片によって構成され、難解なテクストとされている。本章においては『箱男』における語り手[28]、「書く」ことへの言及などについて考察し、箱男という存在様態にさらに接近し作品の新しい読解を提示する。

作品の構造について、杉浦幸恵は「特権的な語り手の不在により」、「語り手が錯綜するという事態が起こった」と指摘している[29]。確かに、『箱男』の物語世界内に語り手が多数存在しているので、物語の断片を位置づけることは難しい。どこまでが「ぼく」が体験していることなのか、どこまでが「ぼく」の想像なのか、どこまでが贋箱男の記述なのか、これらの問題点を解くことは非常に困難である。ただし、「手掛りが多ければ、真相もその手掛りの数だけ存在していていいわけだ」[30]と「ぼく」が結末で述べたとおり、真相は必ずしも一つではない。多数の手掛かりによって、多数の真相が生み出せる。これこそ『箱男』の魅力ではないだろうか。

『箱男』において、虚構性への自己言及が見受けられ、語り手の問題も言及されている。「彼女」に会う前に、「ぼく」は海辺で「彼女」と贋箱男と交渉する場面を想像する。贋箱男は一時間と三十四分でこれほどのノートを書くことができず、ノートを書いているのは「ぼく」ではないと述べる[31]。ここでは、語り手の問題が前面に押し出される。この部分の語り手は「ぼく」ではなく、贋箱男である可能性が存在している。また、この部分は「ぼく」と贋箱男以外の誰かに書かれていることも十分に可能である。つまり、ノートの物語世界の外に語り手が存在している。

『箱男』において括弧はよく使われており、語り手の問題と関連づけられる。例えば次のところである。

（紙が違うだけではない。はじめて万年筆が使用され、字体もあきらかに違っている。しかし、いずれ誰かが、別のノートにまとめて清書するとすれば、紙も字体も簡単に統一されてしまうはずだ。そう神経質に考えることもないだろう。）[32]

括弧のなかの内容によると、この語り手は紙と字体を確認することができる。これはノートの物語世界内にいる「ぼく」にはできないことである。杉浦は「物語世界外に位置する語り手がいない」[33]と主張していたが、この箇所から見れば、ノートの物語世界の外にも語り手が存在していると言えるのではないだろうか。

2　「書く」こと

『箱男』において、「書く」こと自体が注目されている。片野は次のように指摘している。「実際の行為とそれを自分で書くことの間には、必ず時間的な遅れが存在する。その遅延が新たな情報の介入を許し、結果として〈書く自己〉と〈書かれる自己〉はいつまでも統一されることはない」[34]。『箱男』の章の題目が提示したように、

「書いているぼく」と「書かれているぼく」との関係は「不機嫌」である。作中人物である「ぼく」は自分が書かれていることを意識できないはずだが、贋箱男との対話で「ぼく」はそのことを認識し、不機嫌になる。一切の概念枠に反抗したがる箱男は、今度は自分が居るこの物語世界の枠組に不快を感じている。しかし作中人物の箱男にとって、物語の枠組に反抗することは所詮不可能である。作品において、書くことに言及した箇所は贋箱男との対話以外にもある。例えば次の箇所である。

> 机の上には、厚いガラス板。ガラス板の上には、書きさしの《供述書》。まだ起きてはいないし、これから起きるかどうかも分らない事件についての《供述書》。それをわきに押しやって、かわりに一冊のノートをひろげる。四六判、橙色の縦罫……こいつは驚きだ、君がノートまで、ぼくとそっくりのを用意したとは知らなかった。あいまいな手つきで、表紙をめくる。第一ページ目は、次のような文句で始まっている。
>
> 「これは箱男についての記録である。
> ぼくは今、この記録を箱のなかで書きはじめている。頭からかぶると、すっぽり、ちょうど腰の辺まで届くダンボールの箱の中だ。
> つまり、今のところ、箱男はこのぼく自身だということでもある。」
>
> 十数ページを飛ばして、新しいページを開ける。ボールペンを持って、いったん書く姿勢をとりかけたが、思いなおして時計を見た。午前零時までに、あと九分。九月最後の土曜日が終ろうとしているところ。ノートとペンを手にして、席を立つ。ベッドに歩みよる。箱を斜め向うに倒し、後ろからかぶるようにして、もぐり込む。（中略）そなえつけのプラスチック板をテーブル代りに、ノートをつけはじめる。
>
> 「事件のあらましを要約すると、次のようになる。場所はT市、九月最後の月曜日……」
>
> どうやら君は、まだなに一つ始まっていない、明後日のことを、すでに過去の事件として記録しはじめる気らしい。[35]

この引用箇所においてノートが言及されている。第三章において、『箱男』全体は箱男のノートであると結論づけたが、ここでは新しい論拠が現れてくる。引用箇所の「これは箱男についての記録である。（中略）箱男はこのぼく自身だということでもある」という内容は、間違いなく『箱男』という作品を構成した一つの断片の内容である。その内容には《ぼくの場合》というタイトルが付けられ、二枚目の断片として作品に登場した。引用箇所の記述から見れば、Cはこの断片の書き手と考えられる。

さらに注目すべきなのは、引用箇所とその前後の部分において、

物語内容と物語言説とは高い一致性を持つという点である。作品において、《Cの場合》の前の断片は書き終えなかった《供述書》であり、このことは引用箇所における描写とは一致している。Cは《供述書》を「わきに押しやって」「ノートをつけはじめる」が、Cがノートに書いた言葉はそのまま作品の内容となっている。ここにおいて、Cが書いている言葉と、作品に載っているCの言葉との間には、時間的な遅れがほとんど感じられない。また、《Cの場合》の次の断片は《続・供述書》であり、今のノートを書き終えた後で、Cはまた供述書を書きつづけると推測できる。

ただし、《Cの場合》の語り手を判断することは難しい。作品において、《Cの場合》の語り手は軍医の「ぼく」とされているが、「ぼく」がどのようにして、どこからCを観察するのかについては不明である。Cが語り手となり、自分を観察する「ぼく」を想像しながらこの断片を書くのも可能であるが、その論拠はまだ足りない。また、ノートの物語世界の外にいる語り手によってこの断片が書かれたことも可能である。

『箱男』において、このような語り手が判明できない断片は多数存在している。ただし、語り手が判明できないというのは必ずしも悪い事態ではない。唯一の真相を執拗に追究するより、より多くの可能性を生み出すのが一層有意義なのではないだろうか。

3　新しい読解へ

最後に、断片のそれぞれの語り手を推定し、作品の新しい読解を提示してみたい。杉浦[36]と田中[37]は『箱男』の語り手について具体的に考察していたが、いずれも問題点が存在している。杉浦は語り論の観点から作品の語りを考察したが、箱男と贋箱男との関係に拘りすぎ、語り手についての分析は明晰になっていない。田中は各断片の語り手について詳しく分析したが、明確な結論に至らなかった。筆者の考えでは、箱男と贋箱男との関係に拘る必要はなく、軍医とCのことと理解すればよい。語り手を判明できない断片が多いが、それはむしろより多くの可能性を生成させるので、一つの真相を求めることはない。

以下のように、各断片の語り手を推定し分かりやすく整理する。可能性が一番高いものを断片の左側に示しているが、ほかの可能性もあるので、括弧のなかに入れた。判断不能の場合、「不明」と表記する。便宜上、文字の断片に番号を付けている。

ネガフィルム

①《上野の浮浪者一掃　けさ取り締り　百八十人逮捕》
不明

②《ぼくの場合》
C

③《箱の製法》
軍医

④《たとえばAの場合》
軍医

⑤《安全装置を　とりあえず》

軍医

⑥《表紙裏に貼付した証拠写真についての二、三の補足》

軍医

⑦《行き倒れ　十万人の黙殺》

不明

⑧《それから何度かぼくは居眠りをした》

不明（軍医）

⑨《約束は履行され、箱の代金五万円といっしょに、一通の手紙が橋の上から投げ落された。つい五分ほど前のことである。その手紙をここに貼付しておく》

「彼女」

⑩《……》

軍医

写真1～4

⑪《鏡の中から》

軍医

⑫《別紙による三ページ半の挿入文》

不明（C・「彼女」）

⑬《書いているぼくと　書かれているぼくとの不機嫌な関係をめぐって》

不明（軍医）

⑭《供述書》

C

⑮《Cの場合》

不明（軍医）

⑯《続・供述書》

C

⑰《死刑執行人に罪はない》

不明（軍医）

写真5～8

⑱《ここに再び　そして最後の挿入文》

軍医

⑲《Dの場合》

不明

⑳《……》

不明（軍医）

㉑《夢のなかでは箱男も箱を脱いでしまっている。箱暮しを始める前の夢をみているのだろうか、それとも、箱を出た後の生活を夢みているのだろうか……》

不明

㉒《開幕五分前》

不明（軍医）

㉓《そして開幕のベルも聞かずに劇は終った》

不明（軍医）

㉔《……》

不明（軍医）

軍医が語り手を担っている断片は多いため、まず箱男の「ぼく」と軍医との関係について説明する。箱男の「ぼく」と軍医とは同一人物と考えられる。Cは供述書のなかで「ぼく」が軍医と提示しているが、そのほかにも論拠が挙げられる。例えば、断片⑪《鏡の中から》において、「ぼく」は「もう何度か通った道なのだが、箱をかぶって歩くのはこれが初めてである」[38]と述べる。ここでは、「ぼく」は昔のことを思い出した。まだ箱男になっていない頃、「ぼく」は軍医として何度も病院に行った。さらに、「（ふと思った。何処かで、これとそっくりな光景を見た憶えがある。）」[39]と「ぼく」は言っている。ここで注目すべきなのは、原文でこの一文の配列は特異で、文字の向きが変えられたという点である。菅原克也が提示したように、これが一種の物語行為であり、「語りのありようをさぐるにあたり重要な手がかりを提供する」[40]。筆者の考えでは、この一文が提示しようとするのは、「ぼく」と軍医とは同一人物であるということなのだ。医者だった頃に「ぼく」は「彼女」と贋医者（C）とは親しかったので、同じような光景が目の前に現れると、「ぼく」は刺激を受け記憶が蘇ってしまう。このように、「ぼく」と軍医とは同一人物で、またCも「ぼく」と名乗ったことがあり混乱を避けたいという理由から、「ぼく」でなく軍医と表記することにした。

物語の内容を読めば語り手を判明できる断片が少なくないので、必要なところのみを説明する。断片⑬の語り手は軍医であるはずだが、この断片において語り手の問題が暴露され、語り手は軍医とは言い切れないので「不明」にした。断片⑰も軍医によって語られるように見えるが、彼は自分が死んだ後のことをも描いたので、やはり不明なのである。断片⑱において「ワッペン乞食」が言及されている。その前の断片⑤には、「いずれ機会があれば書くつもりだが、とくに『ワッペン乞食』には目の敵にされたものである」[41]という一文がある。この二つの断片は接続できるので、断片⑱の語り手は断片⑤の語り手とは同じ人物と推定できよう。つまり、断片⑱の語り手も軍医である。断片⑳、㉒、㉓、㉔は軍医の死後に書かれた断片と考えられ、語り手は不明である。ただし、断片⑳で提示されたように、これらの断片は軍医の遺書と理解してもいいのかもしれない。

以上のことから、次のように結論づける。『箱男』自体が箱男のノートであり、各断片の語り手は変わっている。また、各断片は相互に関連している。同じ語り手による連続した二つの断片だけでなく、⑤、⑱のような離れた断片も接続している。さらに、⑯と⑲のように語り手が異なるように見える断片も接続できる。⑯において、軍医の妻であった奈奈は市内にピアノ塾を開業した[42]とCは書いてある。語り手が不明な断片⑲において、ピアノを練習する女教師が登場する。覗くことと覗かれることに異様に執着しているこの女教師は、本当は奈奈なのかもしれない。これで⑯と⑲とも接続できるようになる。このように断片の間の接続から考えれば、『箱男』の読み方はまた増えていくのだろう。

五、おわりに

本稿は覗き、写真、語りをめぐって箱男という存在様態を解明し、『箱男』の新たな読解を示した。箱男は覗き窓を作り、人間が参照する古い概念枠を打破し、概念を借りずに物事を認識しようとする。それと同時に、箱男は自分と同じように純粋な視線を求めている。これは箱男が他人に見られたくない理由である。他人を定義しない純粋な視線を持つ「彼女」は箱男が箱を脱ぐきっかけとなり、「ぼく」は「彼女」との共同生活によって新しい境地を追求している。作品に挿入されたネガフィルムは現像でき、その現像によって『箱男』という作品全体が箱男のノートであることが分かってくる。作品に入れた八葉の写真の撮影者は箱男と考えられる。八葉の写真を鑑賞することによって、読み手は箱男の世界を観察する方法を身につけられる。作品において虚構性への自己言及が見受けられる。各断片の語り手を判明することは難しいが、手掛かりが多ければ真相の数も増えるので、断片の接続によって新たな読解が期待できる。

『箱男』は特異な構造を持ち、箱男の生活を体験する可能性を読み手に与えてくれる。覗き窓から世界を観察すると、概念枠の脆弱性が現前化され、世界をより自由に認識することができる。『箱男』は様々な仕方で概念枠を打破し、新世界への通路を読み手に示す大変貴重なテクストである。

（り　そげん・映像・現代文化論研究室）

注

1 八角聡仁「箱男の光学装置―写真・都市・演劇」、『ユリイカ』第二六巻第八号、一九九四・八、青土社

2 田中裕之「『箱男』論（一）――『箱男』という設定から」、『安部公房文学の研究』、二〇一二・三、和泉書院

3 片野智子「安部公房『箱男』論―匿名化された監視を超えて―」、『学習院大学大学院日本語日本文学』第一一号、二〇一五・三、学習院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻

4 安部公房「《箱の製法》」、「箱男」、『安部公房全集』二四、一九九九・九、新潮社、一四頁

5 八角聡仁「箱男の光学装置」、前掲、一八四頁

6 安部公房「《鏡の中から》」、「箱男」、四六頁

7 田中裕之「『箱男』論（一）」、前掲、二三五頁

8 安部公房「《……》」、「箱男」、四五頁

9 安部公房「《書いているぼくと　書かれているぼくとの不機嫌な関係をめぐって》」、「箱男」、七六～七七頁

10 鳥羽耕史『運動体・安部公房』、二〇〇七・五、一葉社、二七〇頁

11 安部公房「《供述書》」、「箱男」、九〇頁

12 片野智子「安部公房『箱男』論」、前掲、五三頁

13 永野宏志「書物の『帰属』を変える―安部公房『箱男』の構成における『ノート』の役割―」、『工学院大学研究論叢』第五〇巻第一号、二〇一二・一〇、工学院大学

14 中野和典「見ること、書くことの不可能性と可能性―安部公房『箱男』論―」、『近代文学論集』第四六号、二〇二〇、日本近代文学会九州支部

15 中野和典「見ること、書くことの不可能性と可能性」、前掲、六四頁

16 安部公房「《安全装置を　とりあえず》」、「箱男」、二七頁

17 安部公房『箱男』、一九七三・三、新潮社
18 安部公房『箱男』、二〇〇五・五、新潮社
19 安部公房「《安全装置を　とりあえず》」、「箱男」、二七頁
20 安部公房「《表紙裏に貼付した証拠写真についての二、三の補足》」、「箱男」、二九頁
21 髙田一樹「安部公房における文字テキストと視覚表象との関係性―『箱男』を中心に―」、『福岡教育大学国語科研究論集』第六一号、二〇二〇・二、福岡教育大学国語国文学会、二一頁
22 真銅正宏「『箱男』の寓意――遮蔽・越境・迷路」、『國文學解釈と教材の研究』第四二巻第九号、一九九七・八、學燈社、六四頁
23 八角聡仁「箱男の光学装置」、前掲、一八五頁
24 永野宏志「書物の『帰属』を変える」、前掲、一六二頁
25 安部公房「《箱の製法》」、「箱男」、一五頁
26 安部公房、ナンシー・S・ハーディン「安部公房との対話」、一九七三・一一～一二、『安部公房全集』二四、一九九九・九、新潮社、四七二～四七三頁
27 髙田一樹「安部公房における文字テキストと視覚表象との関係性」、前掲、一九～二〇頁
28 語りの理論に関して、菅原克也の『小説のしくみ』（二〇一七・四、東京大学出版会）を参照した。
29 杉浦幸恵「安部公房『箱男』における語りの重層性」、『岩手大学大学院人文社会科学研究科研究紀要』第一七号、二〇〇八・七、岩手大学大学院人文社会科学研究科、二三頁
30 安部公房「《……》」、「箱男」、一四一頁
31 安部公房「《書いているぼくと　書かれているぼくとの不機嫌な関係をめぐって》」、「箱男」、八四～八六頁
32 安部公房「《別紙による三ページ半の挿入文》」、「箱男」、五六頁
33 杉浦幸恵「安部公房『箱男』における語りの重層性」、前掲、一三頁
34 片野智子「安部公房『箱男』論」、前掲、五一頁
35 安部公房「《Cの場合》」、「箱男」、九三頁
36 杉浦幸恵「安部公房『箱男』における語りの重層性」、前掲
37 田中裕之「『箱男』論（二）――その構造について」、『安部公房文学の研究』、二〇一二・三、和泉書院
38 安部公房「《鏡の中から》」、「箱男」、四六頁
39 安部公房「《鏡の中から》」、「箱男」、四八頁
40 菅原克也『小説のしくみ』、前掲、四六頁
41 安部公房「《安全装置を　とりあえず》」、「箱男」、二四頁
42 安部公房「《続・供述書》」、「箱男」、九八頁